

第2講 マーリク・ブン・ファハムのオマーン定着と対ペルシヤ戦から終結まで

イマームのサーリミー、神が彼に慈悲を垂れんことを、が言った。私は、この件に詳しいと主張している人が次の様に言っているのを聞いた。「それはイスラームより2000年前のことだった、そしてそれは、キリスト時代マリヤムの子イーサーに先立つこと数世紀の先行を必要としていて、もしイスラームより2000年前であったとすれば、私の知るところでは、マーリク・ブン・ファハムのずっと前に、イムラーン・ブン・アーミルがオマーンに来て居て、又その前にオマーンにはオマーン・ブン・カフターンが居た。オマーン・ブン・カフターンとイムラーン・ブン・アーミルの間に長い数世紀があり、イムラーン・ブン・アーミルとマーリク・ブン・ファハムの間も同様である。

この間の事と、イスラームとの間が2000年だと言っても、否定できない。カフターン人がオマーンを3度領有したことになる。これは歴史の精読によれば正当に近い。神が(イエメンの)マーリブ(にあった)ダムを破壊を裁定し、マーリブの人々に移動と立ち退き決めた時、人々は、全能の神の望んだ英知に従い、地上の各地へと別れて行った。この事については聖典裁定の中で神が定められている。神はマーリブに大洪水を送り、サバア・ブン・ヤシュジブ・ブン・ヤアリブ・ブン・カフターンの建設したダムを破壊され、国は滅亡し、人々(神の僕)は散って行き、(偵察の為の)先駆者たちは人々の為に国を求めて出て行った。ある者たちはマッカに行き、ある者たちはマディーナに行き、ある者たちはシリアに行き、またある者たちはサラールからオマーンに出て行った。

マーリク・ブン・ファハムが、オマーンへ出て行った人々の最後の者であったと思われる。というのは、ダムの破壊の確かな知識を既に持った彼の身分の高い部族民が先導していたからであった。彼らはその事を示す兆候を見て知っていた。彼らの女占い師トライファのおおげがあったかのように、その国へ出て行ったのである。そしてそこで一族として定住し、長く生活したのであった。おそらくマーリクは自分の国に滞在することを好んだのであろう。可能かどうかに関わらず、事が実現し、出て行く必要が分かるまでは。そして国を出たが、前述の時代にオマーンに住んでいた元々のアズド族や彼らの族長が、彼(マーリク)の民であり、部族民であったことから、あらかじめオマーンの知識得ていたに違いない。これが故にオマーンを選んだように思われる。特にイムラーンとその一族がシリアに定着した(が故に別の地であるオマーンに向かった)。

書「ムンタハブ(選書)」の中で、アズド族の分散に言及して述べている:彼らの或る者はサラールへ行き、またその中の者にはエジプトに行った者、イラクへ行った者もあり、又オマーンに行った者もあると。又述べている:アズド族でオマーンに住んだ者はヤフミド、アルフッダーンとマーリクがいる。彼はつまりブン・ファハムである。また述べている:オマーンその他へ向かったアズド族には、アルハジャル、ラハブ、ナウラ、アーイズ、バーリク、サワーム、ハーリサ及びシンジャールそれからアリーとオマーンがいる。

この事は、オマーンと称され、そこに総じて住んでいたアズド族の部族が、そこ(オマーン)に住んでいた者であり、恐らくその名前がオマーンに付けられたものであろう。その名は海岸部、内陸部の全ての地方に広がっていた。

ヤフミドはアズド族のハマールの子孫であり、アルフッダーンは、アズド支族のシャムスの子孫であり、マーリクは知っての通りで、アルハジャルはアズド族ではなく、ラハブとナウラとアーイズとバーリクとは、我々が知っているように、彼らの中でオマーンには誰も残らなかった。おそらく彼らは他の部族に入ったのであろう。同様に、サワームとハーリサについて我々は彼らについては何も知らない。シンジャールについても同様に知らない。「著名人集」では、シンジャールはオマーンのカサバ(中心地)であり、その意味するところはソハールであった、とある。また神は「ムンタハブ」の著者が言っていることを最もよく知っていられるお方である。同様に、アリーとオマーンがいる。アリーについて言えば、もし彼らがバヌー・アリー(アリー族)であれば、オマーンに存在している。一方オマーンに関しては、バヌー・オマーン(オマーン族)は存在していない。

イマームであるサーリミーは、マスウーディーの「アルマルウジュ(黄金の草原)」を引用して、述べている「マーリクは、イエメンからジャフナ・ブン・オマル・ブン・アーミル・マジキーヤの一族と共に出了。ジャフナの一族はシリアに向かい、マーリクは前述の様に、別れてイラクへ向かった、そしてムダル人達のところで、威厳があり尊敬され栄誉ある王としてイラクに留まったのであった。但し、彼は王に指名された王ではあったが、諸王の常の様な王ではなかった。彼に関してのその状況が、容易ならざる一時期が続いた。」

アブー・ハーティム・サジュスターニーが、アブー・ヤクザーを通してアブー・ウバイダの言葉を聞き伝えて述べている。「マーリク・ブン・ファ

ハムが彼の部族から別れて出た理由は、それは国内で自分の部族の分散が起きた後であり、大洪水がマーリブの二つの楽園から彼らを追い出して、サラーに住むことになったの時の事であったが、マーリク・ブン・ファハムが羊飼いが山羊の群れを連れて出て、彼らの途上の道には1匹の雌犬が居た。また他の話では、そこにはダウス族の少年が所有する1匹の飢えた雄犬が居て、マーリクの羊飼いに襲いかかったので、羊飼いが犬に矢を射掛けて殺してしまった。すると犬の飼いが、マーリクの羊飼いと対立したので、彼(マーリク)と彼の一族の中で彼に従う者はサラーから出て行った。それは、ダウス族がマーリクに最も近い彼の部族的源に属しているからであり、彼(マーリク)が彼らの間の厳しい騒乱を恐れたからであった。その日以来、これは「犬のお助け」と名付けられた。マーリクはオマーンに向かって出た。また彼の一族や民とアズド族のうち彼の氏族の者で彼に同意して服する者、またクダーアの地から彼に服し、後を追う者も共に国を出て、オマーンに向かったのだった。その前に既に彼の子どもジッサイマ・アルアブラシュはアズド族の勇士たちの残りからお付の者を連れてイラクへ別れて出たのであった。」

アブー・アルムンジル・ブン・ヒシャーム・ブン・ムハンマド・ブン・アッサーイブ・アルカルビーが述べている。「彼(サジュスターニー?)とシャルキー・ブ・アルカタミーが次の様に言って私に告げた、『マーリク・ブン・ファハムがサラーからオマーンに向かって出て途上の時、彼の駱駝群がどうしても草地にも行きたがって、サラーの方へ曲がり、その欲望を繰り返したのであった。駱駝群の習性(固執)はその様であった。その訳は、それ(駱駝)が故郷に慣れ親しんでおり、他の全ての動物を上回ってその場所に定住するものであるからである。この時、マーリクの怒りが燃え上がり、これに関する詩を朗読した-私達はそれを今や述べられないが』と。」

また彼(アブー・アルムンジル)が言った。『『すぐにオマーンに向かって行ったが、ムアド出自のアラブ諸部族の中の或る部族やイエメン諸部族の中の彼ら以外の部族の所を通らないようにした。この事は彼(マーリク)の性格と氏族の多さが故のことで、彼と平和裏に上手く行っていた部族以外のところを(通過しなかった)』と。」

この事は、行路は駱駝による陸路であることを示していた。だがマーリクが何処からオマーンに入ったか考えてみよ。彼(アブー・アルムンジル)は以下の様に述べている。「その後、この行路によって、パルフト-それはハドラマウトのワジであるが-へ向かって進み、しばらくそこに留まり休憩して、行く先をオマーンに向けた。そのときオマーンにはペルシャ人が居て、彼らがその住人であり、その地を分かち合っていて住んでいた。彼と彼らとの間でいさかきが起こることは避けられないと言う知らせが届いた。そこで彼は自分の(部族の)男達を閲兵した。すると彼らは約6000の騎馬隊と歩兵の精鋭であり、また彼らが、必要時に多くの兵士を必要としない(程優れた)大隊群であることが分かった。(その事は)賢明さを隠し様もない理由(自明の理由)からであった。そこで彼は彼らと共に、満足と怒りの状態で、オマーンに向かって近づき始めた。」

既に先頭にはマーリクの息子のハナーを、もしくは、フェラーフィード・ブン・マーリクとも言われているが、配した。この二人(の息子)は彼の許における最も優れた彼の子供たちの中の二人の優れ者であった。彼(マーリク)は、この二人をアズド族の指導者たちからなる2千の騎兵とその騎馬に入れた。それからオマーン向かって行き、遂にアルシャハルを目指すことになった。そこでマフラ・ブン・ハイダーン・ブン・アマル・イブヌ アルハーフ・ブン・クダーア・ブン・マーリク・ブン・ヒムヤルが彼(マーリク)と別れて、アッシャハルの地に留まった。」

アルカルビーが述べている、「ティハーマからアラブを出た最初の人は、マーリク・ブン・ファハム・アルアズディーとアマルとフハイム・ブン・タイムッラー・ブン・アサド・ブン・ワビラ・ブン・サアラバ・ブン・ハルワーン・ブン・アルハーフ・イブヌ クダーア・ブン・マーリク・ブン・ヒムヤルの一族であった。(前述の)マフラはアルシャハルに留まり、アズド族諸部族の中に居たマーリク・ブン・ファハムと彼と一緒に居たクダーア族の地から来た者達とはオマーンの地に入った。そしてオマーンでペルシャ王ダール・イブン・ダーラー・ブン・バフマン イスファンディヤールの指示で来たペルシャ人と遭った。彼らは当時その民であり住民であった。彼らの指導者はペルシャ王の代行であるマルジバーンであった。その時、マーリク・ブン・ファハムは召使たち、家族、女たち、積荷を(北方の港町)カルハートの近くに留まらせた。私は述べた、この事から彼が海路オマーンに来たことがはっきりする、と。当時この方向から馬や駱駝で来る道は無かった。彼はアルシャハルを通って来て、普通の駱駝で入るのに適した、あれやこの方向からオマーンへ入った、と私は考えていた。一方カルハート経由であれば馬や駱駝をカルハートまで舟で運ばなければならない。」

また彼(アルカルビー)は述べている。『『(カルハートを選んだ事は)彼らにとって、最も(敵を)近寄り難くする為であり、彼らの元に彼らを守る馬や兵士を置いてゆくことのためであった』、すなわち彼らを攻撃してきたとき、彼らを敵から守る守備隊を彼らのために残しておく、

ということである。恐らく彼は、船で家族や積荷をカルハートへ向かわせたのであろう、と私は言った。そしてこの事ははっきりしたことである。

マーリック・ブン・ファハムがオマーン内陸への侵入を望む

マーリックがカルハートに降り立ったとき、そこに扶養者たちに、維持する力として積荷を留め置いた。というのは、カルハートは山々により(遮られた)堅牢な小さな町だったからであった。そして扶養者達の元には十分な守備隊が必要であった。ペルシャ人たちは、ソハールとそこに至る他の地区にいて、この事は次の時まで続くのである。即ちマーリックの上陸というニュースがソハールに届き、彼の目的が達成される、つまり自分の首長国の支柱を立てる事が出来、オマーンに彼の軍事キャンプを建てた、時までのことであった。

また(アルカルビーは)次の様に述べている。「『その後、マーリックは、残りの軍と部下の指導者達を連れて出た。既に先頭には息子のハナーを2000の騎馬隊とともに配置し、彼はオマーンを中心であるジャウフにまで侵入した。そしてマーリックは確固とした決意と揺るがぬ魂をもって、その地に進攻した。ペルシャ人達は、彼の決定を受け入れたのか、はたまた納得しなかったのであろうか』」。

砂漠に陣地を定め、そこからペルシャ人達に使者を送り、彼らにオマーンの一部所に留まるように求めた。すなわちペルシャ人達に望んだのは、(マーリックが)定住する場所を彼らが彼に分け与えることであった。(そこに限定することで)それ以外に、彼は彼らを困らせることをしないし、彼らも彼を邪魔立てすることもしない、ということであった。マルジバーンは彼ら(ペルシャ人達)の中では、長の地位つまり彼らの王であった。彼が皆に頼んだのは、この件でマーリックを許し、彼に水と牧草地を(使用することを)可能にすること、その後、何が適切か、つまり彼がペルシャ人達と一緒に定住するか、彼らの元から旅立つかを彼自身で見極めるまで、避難民として残るといったことだった。

ペルシャ人たちはこの件に関する会議を開催

マーリックがオマーンに降りて来るという知らせが着いて、彼がペルシャ人達に、オマーンに留まって、平和的、和解的且つ平静な状況で定住することを彼らに望んでいるのを知ったとき、(ペルシャ人達は)彼らの中で議論を長引かせることになり、会議を行い、相談した。

発言された意見を詳しく検討した結果、意見はマーリックの要請を受け入れないことで一致し、彼が純粋のアラブ人であるが故に(彼の求めを)可能にさせない、と言うことになった。

また同様に彼が偉大な王であり、ペルシャ人達は彼がオマーンに居ることにより、オマーンを占有することを恐れた。彼らは彼に対し、このアラブ人が我々と共に居り、(その事により)我々と我が地、我が国を圧迫することを望まない、と率直に語った。特に王ダーラ・ブン・ダーラーが、彼らにマーリック・ブン・ファハムがオマーン居ることを恐らく認めないと言う理由で。

またペルシャ王の(気性の)激しさと諸王国を統治する王達の妬みが、このような状況を、これらの如きイエメンの族長達には許さないと言う理由で。また彼らが言ったのは、我々は彼の近くに、隣り合っている必要は無いと言って。マーリックのところへ彼らの-彼(マーリック)のオマーン滞在には反対である-という返事が届いた時、マーリックはその返事に含まれる真実を見出した。そしてオマーンの一箇所に滞在し、水と牧草地を彼らが彼と共有する必要があることが分かった。

そして彼は次のように言った。「あなた方が、言う通りにして私を(現状の俥にして)くれれば、オマーンの(何処かで)居を定め、あなた方に感謝します。もし拒否すれば、あなた方を憎みながら定住します。私と戦ってくるならあなた方と戦います。そして私があなた方に勝てば、戦い抜き殺戮し、子どもたちを捕虜にします。永遠に誰一人もオマーンに住ませません。」

(アルカルビーは)次の様に述べている、「ペルシャ人達は、マーリックを言うが俥にさせることを拒否し、彼との戦争と戦闘の準備を始めた。」

マーリック・ブン・ファハムはオマーンに居るペルシャを壊滅させる準備

また(アルカルビー)は述べている。「マーリックは、ペルシャが彼に向かって立ち上がり、彼らが彼をこの俛で済ませない、とは分かっていた。それが分かったのは、定住場所の支柱を確固としたものにしたと思い、心の中でどんな場合でも出て行かないし、彼とペルシャ人達との戦いもやもう得ぬと決心した後のことだった。彼は彼の代理者達を配置し、兵士を組織した。(それは)安全保障の(上に付いた)塵を振り払い、森の中のライオンの様に熱情に燃えてのことであった。彼は、食べ物に対する食欲の視線以外でペルシャ人を見ることはなかった。そして毒の一飲み of の如く飲み干すと決めていた。治癒しようが滅びようが、名誉の下でそのアラブ(マーリック)が生きようが、死のうが。

マーリック・ブン・ファハムと彼の部族の陣地は、オマーンを中心のマナフと言うオアシスにあった。彼こそが、そこにマーリックのファラジュ(水路)として知られるファラジュを掘った人である。ペルシャ人はその時にオマーンの海岸に居て、彼らの軍隊はオマーン的首都であり東の貯蔵庫であるソハールに居た。ペルシャ人がマーリック・ブン・ファハムとの戦争か、オマーンを出て行くしかないと思なしたときに、数多くの町や人々の間で(ペルシャ人)が糾合して立ち上がり、ラッパを吹き動員を呼びかけ、太鼓をたたいた。そして、完全な規模の軍隊で、先鋭化した中での厳しく頑とした動員態勢で、オマーンを中心を占領したそのアラブ人(マーリック)に怒り狂って向かってやって来た。

ペルシャの(長である)マルジバーンは飛び上がり、歩き回り、ラッパを吹いて戦争を宣言するよう命じた。彼は彼の兵士、軍の中で馬に乗り、大軍と共にソハールを出た。彼の軍は4万とも3万とも言われ、象の群れを連れていた。一頭の象は戦争では千人の兵士を超えると数えられる。マーリックをオマーンから追い出すために向かったのである。マーリック・ブン・ファハムは、名前(の由来通り)、また意義通りのオマーンのジャウフ(内陸盆地)にいた。マルジバーンはそこに向かって出た。アフダル山の近くのサルワト砂漠に軍営を築いた。(この件が)オマーンにおけるアズド族の長マーリック・ブン・ファハムに報じられた。そこで彼と彼と共に居た全員は馬に乗った。彼らは6000の騎兵と歩兵の精鋭であった。彼の先頭には、勇敢な英雄であるマーリックの子ハナー・ブン・マーリックがアズド族の指導者2000の騎士とその馬と共に居た。そしてこの態勢で近づきサルワト砂漠に着いた。

彼はマルジバーンの軍と向かい合って軍営した。そして彼らのその日を、畏怖が心に満ち、両陣営の間では部族的連帯意識の慣わしが強まり、神の加護を求めて過ごした。この日には両軍の間で戦争は起こらなかった。そこで両陣営は彼(神)の命により、一夜を過ごした。ハナー・ブン・マーリックが右翼に、ファラーヒード・ブン・マーリックが左翼に居た。(対峙する)敵軍に比して数が少なかったが、但し彼(マーリック)は決断力が強かった。そして彼らは自分達の大隊を編成し、戦争の準備をした。そしてマーリック・ブン・ファハムが自分の兵士を定位置に停止させ、命令を伝えた。ハナー・ブン・マーリックは右翼に、ファラーヒード・ブン・マーリックは左翼にいた。王からの最高の荣誉者は、戦時彼の右翼にいる彼の子ども一人だったし、次の荣誉者は彼の左翼にいる子ども一人であった。彼自身は彼の側近である勇敢さと激しさを有する民の中で軍の中心にいた。

それでマルジバーンもまた彼の軍の動員とその時の彼のやり方で軍の整列を続けていた。翌日朝になって戦闘の為に隊列を整え、両軍の各人が敵との戦いの準備を始めた時、マーリック・ブン・ファハムは立ち上がり、彼は二重のよろいを着けている様だった、その上に赤いガウンを着て、頭には一片の鉄の塊を着けていた。それは剣、弓矢、槍の一撃から護るものだった。頭のその上に黄色のターバンを巻き、白黒まだらの馬に乗り、この動員時には子供達も彼と共に馬に乗っていた。子供達は鎧と胸当てを既につけていた。彼と一緒にいたアズドの指導者達も同様にしていた、頭は白ターバンで、星のように瞬く瞳孔以外には、(その者達を)見つめる者には何も見えなかった。

戦争の隊列が整った時、マーリック・ブン・ファハムが彼の兵士達に戦争の言葉を述べ、彼らを戦闘の呼び掛けで彼らを(戦いへと)誘い、必死の戦いへと鼓舞し、彼らの周囲を回り、旗旗を見回し、大隊を見回して、(戦闘に関する)彼の言葉では次の様に言った。「アズドの諸君、勇敢さの民、(志を高く)保つ民よ、諸君の祖先を守り、諸君の祖先の功績を護り、諸君の敵と戦い、諸君の王とスルターンに対して忠誠を与えよ。そして諸君が、もし崩壊し敗北したら、ペルシャ人達が諸君をその全兵士で追跡させ、その結果彼らは諸君を全ての石と土の間に捕らえることになる。そして諸君の王は諸君から離れて行き、諸君の名誉と権力は消え去っていく。だから戦争の決意をしなさい。諸君に必要なのは、忍耐と大切なものを護ることだ」

この日、その後あったことの全ては、マーリック・ブン・ファハムの幹部兵士に対する演説であった。彼らを鼓舞し、忠誠を求め、忍耐と我慢を命じ、旗から旗印へ、隊から隊を見回し、そしてとうとう全ての大隊と軍が(出撃し)見えなかった。

マルジバーンが開戦を始める

マルジバーンは周囲の、自分との戦いの準備をしているアラブの態勢を見た。そのため彼は無思慮にもソハールから出て来た。彼は彼の軍隊と全ての彼の指揮官を連れて進軍し、象を先頭に立たせていた。そしてマーリック・ブン・ファハムとその側近へ近づいてきた。そして彼(マーリック)は側近に向かって次の様に言って、攻撃を呼びかけた。

「アズド族の騎馬隊の諸君よ、我と共にこの象を攻撃せよ。命を懸けよ(原意:私の父と母が諸君の犠牲となろう)。諸君の牙と剣で象を囲め。即ち象は彼らが頼りにしている力で、それにより彼らが身を隠している盾だから」

それからマーリック・ブン・ファハムが攻撃し、彼と共にいた勇士達が、熱情と激しさに満ちたアラブ式攻撃を行った。象に向かって槍、弓矢を放ち、さらに剣で追い討ちをかけた。象隊は皆一緒に後ろ向きに戻りマルジバーンの軍に向かった。(象は)彼ら(ペルシャ人の)多くの者を踏みつけた。その後でマーリックが全指導者、全勇士の側近達と一緒にになってマルジバーンとその側近を攻撃したので、マルジバーンの動員体制は崩れ、ばらばらの動きをし、ペルシャ側は分散し、互いに戻って行って、その極限に達した。その時、マルジバーンは側近、兵隊全員に大声で叫び、攻撃を命じたので、彼らは攻撃し、全員集合し、討ち合い、戦闘が激しくなった。聞こえてくるのは鉄の当りあう音、剣の打ち合いの音だけであった。その日は、戦いのうちで最も激しく戦われた。

互いが断固として戦い続け、夜の暗黒が彼らの間に入り、中断させるまで続けて、そして彼らは(戦場を)離れた。既に互いに勝敗半ばであった。皆は、自分達の現況を知り、両者の試練は大きなものであった。両陣営が言っている「自分達が打ち負かされれば、自分達の(消えるしかない)終わりだ。また自分達が勝利すれば、自分達の怒りを癒す事を敵に対して為そうではないか」と。

剣は既に両陣営の兵士の火花を食べつくしていた。只、ペルシャは数で多く、アラブが忍耐で強かった。翌日この体制で戦争が再開され、ペルシャ側で死者が多くなり、アラブの戦闘に対する勇猛さが強かった。そのまま、夜が両者の中に割って入るまで続いた。その夜は、死者の埋葬、負傷者の治療を行った。

三日目も同様かまたはより激しかった。殺戮は、男たちの規範であった。剣は勇士たちの手の中で笑っていた。槍の穂先は象の牙に大きな傷を与えていた。戦争は関係するもの全てを議論なしに破壊する火だった。人々が状況をこの様に見てとった時に、マラージバ族とアサーウィラ族の4人の男が出て来た。彼らは、彼ら(ペルシャ人達の中でも)単なる男とは違って、正に男として見なされている者であった。そして遂にはアズド族の主であり、この戦争の指導者であるマーリック・ブン・ファハムに近づいて、マーリックに言った。

「我々の方へ来いアラブの人よ、我々が貴殿を(宿敵として)我々自身で対等に扱うために。また我々の一人一人が、一人ずつ貴殿のところへ(挑みに)向かおう。」

しかしマーリックは彼らへの応答だけを考えるのみで、彼の心には彼らを恐れることを何も思いはしなかった。即ち彼の気持ちは確固としていて、彼の精神は自信に満ち、既にその事から(精神が)開放されていた。そこには、そこから逃避も救出を求めることもなく、あるのは2つの側面の片方だけであった。アズド族の主、彼の心は(強固で)盾の(如く)であったが、前へと進み出た。彼に向かって、これら4人の勇士の一人が出て来た。2人は1時間追い掛け合い、数分も経たぬうちに、マーリックが予期せぬ剣(さばきで)彼に捕らえ、致命的な一打で倒した。(アルカルビーは)言った。

それから2番目の男が出て来ると、マーリックは彼には哀れみを示した。彼と共にあったのは諸王の勇敢さとアラブの熱情であった。彼はその男を彼の一撃で倒すという事に自制を効かせられなかったのであった。彼はその男を地上に倒すような一撃を加えた。

その後3番目の男が出て来た。既にマーリック・ブン・ファハムは出会う者を飲み込むように口を大きく開けたライオンであった。2人目のペルシャ人騎士がマーリックの頭を打ったが、その打撃は何も起こさなかった。その後マーリックが鎧と兜をつけている3人目のペルシャ人を打った時は、マーリックが彼を一撃したら、兜が割れペルシャ人の頭に達するほどであった。そして彼の肩を一撃すると、肩に鎧を着けていたにもかかわらず、肩を露わにし、鎧が二分し、遂にはマーリック・ブン・ファハムの剣がペルシャ人の乗っている馬の口輪にまで達し、二つの塊として地面に投げつけた。

4番目のペルシャ人はマーリックが自分の仲間達にした事を見て驚き、その事が彼を恐れさせ、マーリック・ブン・ファハムに遭うことを自制した。そしてもし出て行けば、彼は確実に殺されると知った。即ち彼の心は戦いを避けてしまい、彼の仲間達のところへと向かって(マーリックに)背を向けてしまった。そしてその男は彼らの中に入って行った。

マーリクは自分の居場所へと立ち去り、彼の精神は勝利で生き生きしており、勝利の力に満ちていた。アズド族はそれに喜び、ペルシャに勝ったことを目にしたのであった。即ち勝利が勝利を引き起こし、勝利者は勝利を望み続け、勝利者の活気は増え、喜びは大きくなるのであった。

そしてマルジバーンが3人の自分の指揮官達に(マーリクが)したことを目にした時、熱意と怒りが彼に取り付いた。彼は側近達の中から出て、彼ら(3人)の死んだ後に生きていることに、良き事はないと言った。それからマーリクに次の様に呼び掛け言った。

「アラブの人よ、王になろうとするなら私の方へ来い。我々2人のどちらかが相手に勝利したならば、手に入れようとしているものの持ち主になるのだ。我々は仲間を破滅にさらさない。」

彼(ペルシャのマルジバーン)が彼(マーリク)に呼び掛けた事において、マーリクを(宿敵として)対等に扱った。(3人を殺された)この事は(マルジバーンの)怒りを高めていた。剽悍なペルシャ人は栄光と誇りために、生きることより、死を選んだのだった。恐らく彼(マルジバーン)は、あの(3人の)者達が到達できなかったマーリクへの攻撃を自分で行おうと考えたのであろう。

見よ、あの勇敢な勇士マーリクの方を、彼はあの戦場で殺された(3人の)者の殺人者(マーリク)に怒った勇敢な彼の宿敵であるマルジバーンへと歩み寄って行く。そして彼のところへマーリクが、大胆不敵に心を激しく引き締めて出て来た。しばらく2人は互いに徘徊していた。人々は、この戦争の指導者であり、戦いの雄叫びの先導者である2人を見ていた。既に両陣営は彼らそれぞれの馬の手綱をとって、2人の指導者が何をするかを待っていた。そして両陣営の残りの者達は、立ち止まっていて、なにが起こるのか、2人の後に起こるものを待っていた。

マルジバーンがマーリクに、恐れ知らずのライオンのように飛びかかった。すると戦争任務に経験豊かな巧みな者(マーリク)は、狐の如き回避の仕方であつて彼(マルジバーン)を回避した。マーリクは、彼(マルジバーン)に一呉れの憐れみを覚えた。それ(憐れみ)を持って、その頭蓋をその継ぎ目から分け、兜を切り裂き、頭を分断するような一撃を与えたので、死んで地上に倒れた。そしてアズド族が咆哮を有した戦争の石臼を廻すような攻撃をペルシャ人に為し、ペルシャの戦士達はマーリクと彼の側近達に対し攻撃をしかけ、正午から夕刻までの間に激しい戦闘を行った。剣は、兵達の馬を食い、アズド族は一撃、一突きで彼らにとどめをさした。そのため彼ら(ペルシャ人)は敗者として背を向けて、その陣地まで達した。彼らの多くの人々が殺され、負傷者は多くなった。

ペルシャがマーリク・ブン・ファハムに休戦を要請

この戦争の後、ペルシャはマーリク・ブン・ファハムと戦争することの不可能さを感じた。そして常時空に彼らの不運の星が上がり、アズド族の接近を迎えているのを見た。彼らは(かつて)勝利を確信していた。そして明日、何が彼らの身に起こるかも確信した。

つまりマーリクの男達は、恐らく最終的に、自分達に死の裁定を下すのだと。それでペルシャ人はマーリクに使者を送り、彼に頼んだ事は、彼らの生命を(保障)し、休戦と和解への答えを彼らに与え、そして彼らに対する戦争を止め、オマーンから彼らの家族を連れて出る援助を求めるため、彼らに丸1年延期する時を与え、また戦争もせず戦闘もせずに彼らがオマーンから出て行くことであつた。

そしてこの契約に則り、休戦成立に対する人頭税を供与した。マーリクは彼らから要請された事に答え、また問われた事に同意した。そして彼らは、サルワトから彼らの指導部があつたソハールとそこ(オマーン)で彼らが散らばって(住んでいた)諸地域へと移動した。と言う訳で彼らは、彼らとの間の休戦に則って、海岸のこの隅隅に留まった。マーリクはこの件に関して、彼らが戦争や戦闘を始めないかぎり、何も反対しないという契約と協定を彼らに与えた。そして、マーリクは彼らとの戦争を止め、彼らを問われた通りにオマーンに定着させた。と言う訳で彼らは安全な状態でアラブ達との平和裏に共存しつつ、海岸線に定着して残った。アズド族は、内陸の平野部と山間部で王となった。彼らのところへは、彼らの族長職の命令が及んでおり、既にペルシャ人の指揮棒は壊れ、城は破壊されていた。